

■殺菌剤：農業用

ピリジナミン系

フロンサイド®SC

登録番号：22631(1ℓ、5ℓ包装)
18750(500ml包装)

毒性：—

消防法：—

有効年限：3年

成分 フルアジナム……39.5%

物理的・化学的性状 淡黄色水和性粘稠濁液体

包装：500ml×20 1ℓ×15 5ℓ×3

◆特長

- 抗菌スペクトラムの極めて広い殺菌剤です。
- 既存の薬剤耐性菌にも優れた効果があります。
- 残効性、耐雨性に優れ、低濃度で強力な防除効果を発揮します。

◆適用と使用方法

作物名	適用病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用 回数	使用 方法	フルアジナム を含む農業の 総使用回数
りんご	斑点落葉病 黒星病 すす点病 すす斑病 褐斑病	2,000～ 2,500倍	200～700ℓ ／10a	収穫45日前 まで	1回	散布	2回以内 (散布は1回以内、 土壌灌注は1回 以内)
	輪紋病 モニリア病	2,000倍					
	白紋羽病 紫紋羽病	500倍 1,000倍	50～100ℓ／樹 100～200ℓ／樹	土壌灌注			
なし	黒斑病 黒星病 輪紋病	2,000～ 2,500倍 2,000倍	200～700ℓ ／10a	収穫30日前 まで	1回	散布	
	白紋羽病	500倍 1,000倍					
	もも	灰星病 ホモプシス腐敗病	2,000倍	200～700ℓ ／10a		収穫7日前 まで	
白紋羽病		500倍 1,000倍	50～100ℓ／樹 100～200ℓ／樹	収穫30日前 まで	土壌灌注		
うめ	黒星病 灰色かび病	2,000倍	200～700ℓ ／10a	発芽期まで 但し、収穫 60日前まで	1回	散布	
	白紋羽病	500倍	50～100ℓ／樹	収穫後から 開花前まで 但し、収穫 60日前まで			土壌灌注

作物名	適用病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用 回数	使用 方法	フルアジナム を含む農薬の 総使用回数	
ぶ ど う	晩腐病 黒とう病 べと病 灰色かび病 枝膨病	2.000倍	200～700 ℓ ／10 a	開花直前～ 落弁期 但し、収穫 60日前まで	1 回	散布	2 回以内 (散布は1回以内、 土壌灌注は1回 以内)	
	白紋羽病			収穫21日前 まで		土壌灌注		
び わ	灰斑病	2.000倍	200～700 ℓ ／10 a	収穫7日前 まで		散布		
	白紋羽病	500倍 1.000倍	50～100 ℓ／樹 100～200 ℓ／樹	収穫後から 開花前まで		土壌灌注		
キウイフルーツ	灰色かび病 果実軟腐病	2.000倍	200～700 ℓ ／10 a	収穫30日前 まで		散布		1 回
か ん き つ	そうか病 灰色かび病	2.000～ 2.500倍						
	黒点病 ミカンハダニ ミカンサビダニ チャノホコリダニ	2.000倍	200～700 ℓ ／10 a	収穫45日前 まで				
か き	落葉病 黒星落葉病 炭疽病 灰色かび病	2.000倍						
ネクタリン	白紋羽病	1.000倍	100～200 ℓ／樹	収穫30日前 まで		土壌灌注		1 回
おうとう いちじく		500倍	50～100 ℓ／樹	収穫21日前 まで				
ブルーベリー				収穫後から 開花前まで 但し、収穫 60日前まで				
小粒核果類 (うめを除く)		500倍	—	植付時				
り ん ご (苗 木)	白紋羽病 紫紋羽病	500倍	25～50 ℓ／樹	植付後 但し、収穫 開始1年前 まで	20分間 苗木浸漬	2 回以内 (苗木浸漬は1回 以内、土壌灌注 は1回以内)		
	キウイフルーツ (苗 木)			白紋羽病	—		植付時	1 時間 苗木浸漬

作物名	適用病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用 回数	使用 方法	フルアジナム を含む農薬の 総使用回数
小麦	紅色雪腐病 雪腐大粒菌核病	1.000倍	60～150ℓ ／10a	根雪前	2回 以内	散布	3回以内 (は種前は1回 以内、は種後は 2回以内)
	雪腐小粒菌核病	1.000～ 2.000倍 250倍					
ばれいしょ	疫病	500倍	25ℓ／10a	収穫7日前 まで	4回 以内		6回以内 (種いも浸漬は 1回以内、植付前 の土壌混和及び 植付時の植溝 散布は合計1回 以内、植付後の 散布は4回以内)
	疫病 菌核病	1.000～ 2.000倍	100～300ℓ ／10a				
	夏疫病	2.000倍					
	そうか病	100倍	—	植付前	1回	種いも 瞬間浸漬	
やまのいも	葉渋病	2.000倍		収穫7日前 まで	4回 以内	散布	5回以内 (植付前の土壌混和 は1回以内、植付後 の散布は4回以内)
あずき	炭疽病 灰色かび病	1.000～ 2.000倍	100～300ℓ ／10a	収穫21日前 まで	3回 以内		3回以内
	菌核病	1.000倍		収穫7日前 まで			
いんげんまめ	炭疽病 灰色かび病	1.000～ 2.000倍				収穫14日前 まで	
	べにばないんげん	灰色かび病		1.000倍			
たまねぎ	灰色腐敗病 べと病	1.000～ 2.000倍	25ℓ／10a	収穫3日前 まで	5回 以内	6回以内 (苗根部浸漬は 1回以内、散布 は5回以内)	
	灰色かび病	500倍					
	白色疫病	1.000倍					
てんさい	根腐病	1.000～ 2.000倍	100～300ℓ ／10a	収穫30日前 まで	4回 以内	株元散布	5回以内 (は種前の土壌混和 及び苗床灌注は 合計1回以内、株元 散布は4回以内)
	黒根病	1.000倍	3ℓ／㎡	移植前	1回		
いちご	炭疽病	1.000倍	50ml／株	育苗期		灌注	1回
アスパラガス (露地栽培)	茎枯病 斑点病		100～300ℓ ／10a	収穫終了後 但し、秋期まで	5回 以内		5回以内
茶	炭疽病 輪斑病 新梢枯死症 (輪斑病菌による) もち病 網もち病 灰色かび病 褐色円星病 チャノホコリダニ	2.000倍	200～400ℓ ／10a	摘採14日前 まで	1回	散布	1回

作物名	適用病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用 回数	使用 方法	フルアジナム を含む農薬の 総使用回数
ゆり	茎腐症 (リゾープス菌による)	500倍	3ℓ / m ²	定植後	2回 以内	土壌灌注	3回以内
うるし	白紋羽病		20~50ℓ / 樹	発病前	1回		1回

作物名	適用 病害虫名	使用量		使用 時期	本剤の 使用回数	使用 方法	フルアジナム を含む農薬の 総使用回数		
		薬量	希釈水量						
はくさい	根こぶ病	500ml / 10 a	100~200ℓ / 10 a	定植前	1回	全面散布 土壌混和	2回以内 (土壌混和は1回 以内、土壌散布は 1回以内)		
	尻腐病 軟腐病					全面 土壌散布			
キャベツ	苗立枯病 (リゾクトニア菌) 菌核病 根こぶ病			定植前	は種 又は 定植前	2回以内 (苗床では1回 以内、本圃では 1回以内)	全面散布 土壌混和	3回以内 (苗床では1回 以内、本圃での 土壌混和は1回 以内、土壌散布 は1回以内)	
	菌核病								全面 土壌散布
ブロッコリー カリフラワー	根こぶ病			は種前	定植前	全面散布 土壌混和	1回		
かぶ	亀裂褐変症 (リゾクトニア菌)								
だいこん	ビッグベイン病 すそ枯病							定植前	全面 土壌散布
レタス 非結球レタス	すそ枯病 軟腐病								
ばれいしょ	粉状そうか病			400~600ml / 10 a	20ℓ / 10 a	植付前	1回	全面散布 土壌混和	6回以内 (種いも浸漬は1回 以内、植付前の土 壌混和及び植付時 の植溝散布は合計 1回以内、植付後 の散布は4回以内)
	粉状そうか病 そうか病			200ml / 10 a				植付時	
やまのいも	褐色腐敗病	500ml / 10 a	100~200ℓ / 10 a	植付前	全面散布 土壌混和	5回以内 (植付前の土壌混和 は1回以内、植付後 の散布は4回以内)			
小 麦	縞萎縮病	600ml / 10 a	100ℓ / 10 a	は種前		3回以内 (は種前は1回以 内、は種後は2回 以内)			
チューリップ	微斑モザイク病 条斑病	500ml / 10 a	100~200ℓ / 10 a	植付前		7回以内			

ラベルをよく読み、ラベルの記載以外には使用しないで下さい。

◆注意事項

- (1)使用直前に容器をよく振ること。
- (2)使用量に合わせ薬液を調製し、使いきること。
- (3)本剤は、保護効果主体の薬剤であり、病原菌に感染した後の散布では効果が十分な場合があるので散布時期に注意すること。
- (4)かんぎつに使用する場合は、次の事項に注意すること。
 - ①レモンには薬害を生じるので使用をさけること。
 - ②病害とミカンハダニの同時防除に使用する場合、かけ残しのないように丁寧に散布すること。
- (5)なしに使用する場合は、次の事項に注意すること。
 - ①幸水等の赤なしの幼木や樹勢の劣る樹では、新葉に薬害が発生するおそれがあるので注意すること。
- (6)ぶどうに使用する場合は、葉や果実に薬害が発生するおそれがあるので、使用時期を厳守すること。なお、ネオマスカットは特に薬害を生じやすいので使用をさけること。
- (7)いちごに使用する場合は、新葉に薬害を生じるおそれがあるので注意すること。
- (8)本剤と他剤との混用は、薬害を生じやすいので注意すること。特に、なし、ぶどう、もも及びうめでは十分注意すること。なお、うめについては発芽期までの使用に留めること。
- (9)きゅうり、レタス等には薬害を生じるおそれがあるので、周辺にそれらの作物がある場合にはかからないように注意して散布すること。
- (10)白紋羽病、紫紋羽病対象に本剤を土壌灌注する場合
 - ①樹幹から半径1m程度の範囲を掘り上げて根部を露出させ、病根を除去した後所定濃度の薬液を灌注し埋め戻すか、半径1m程度の範囲に土壌灌注機を用いて所定量の薬液を灌注すること。但し土壌灌注機による灌注は予防的使用が軽症樹に限って行うこと。
 - ②苗木に使用する場合は、植付時に所定量の薬液を灌注しながら掘り上げた土を埋め戻すか、植付後に土壌灌注機を用いて所定量を注入すること。
 - ③樹の大きさにより灌注水量を調節すること。また、灌注水量を厳守し、灌注水量が100ℓ以上必要な場合は、1,000倍で使用すること。
 - ④10アール当たりの処理本数が多い場合には、150本を超えないように適用の範囲内で使用すること。
- (11)全面散布土壌混和で使用する場合は、所定量の薬量を均一に散布し、土壌と十分混和すること。降雨直後の処理は、混和むらの原因となるのでさけること。
- (12)根こぶ病対象に本剤を多量に使用すると初期生育が抑制される場合があるので適用薬量の範囲で使用すること。
- (13)全面土壌散布で使用する場合は、畦立て作業後に所定量の薬量を均一に散布すること。
- (14)キャベツ、はくさい、レタス及び非結球レタスの全面土壌散布では、初期生育の遅延を生じることがあるが、その後回復し、作物の生育、収量に影響はない。(定植後の多雨または、過度の灌水条件で発生しやすい)
- (15)だいこんに使用する場合は、初期生育の遅延を生じることがあるが、その後の生育には影響しない。
- (16)蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにすること。
- (17)小麦、ばれいしょ、たまねぎに対して少量散布で使用する場合は、少量散布に適合したノズルを装着した乗用型の速度連動式地上液剤散布装置を使用すること。
- (18)本剤の使用に当たっては、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

- (19) 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用すること。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- (20) 取扱及び保管上の注意、漏出時の措置、廃棄上の注意、輸送上の注意、火災時の措置については、11ページ、12ページを参照すること。
- (21) フロンサイド剤と他農薬を混用する際に高アルカリ性用水（pH10以上）で希釈すると、凝集物が発生する場合がありますので、高アルカリ性用水による希釈はさけること。

◆安全使用上の注意

- (1) 本剤は皮膚感作性を有するため、皮膚かぶれ等を生ずることがあるので、以下の点に注意すること。
 - ① かぶれやすい体質の人及び本剤又は他剤においてかぶれた経験のある人は作業に従事しないようにし、施用した作物等との接触はさけること。
 - ② 薬液調製時及び使用の際は帽子、保護眼鏡、防護マスク、不浸透性手袋、不浸透性防除衣、ゴム長靴などを着用するとともに保護クリームを使用すること。
 - ③ 降雨時又は樹木が濡れている場合には作業を行わないこと。
 - ④ 剪定、施肥、摘果、除草、袋かけなどの管理作業をすませてから使用すること。
 - ⑤ 使用後の入園はできる限り期間をおくこと。特に摘果、袋かけのような作業を行う果樹では少なくとも7～10日間の期間をあけること。
 - ⑥ 使用後の入園の際も、帽子、保護眼鏡、農業用マスク、手袋、長ズボン・長袖の作業衣などを着用するとともに保護クリームを使用すること。
 - ⑦ 使用した後及び摘果等のため使用後入園し作業した後は直ちに身体を洗い流し、洗眼・うがいをするとともに衣服を交換すること。
 - ⑧ 作業時に着用していた衣服等は他のものとは分けて洗濯すること。
 - ⑨ 施設内では使用しないこと。
 - ⑩ 高温、多湿時に長時間の使用及び作業は避けること。
 - ⑪ 苗床で本剤を使用し、その苗を採苗、定植する場合には、必ず手袋を着用して作業を行い、直接苗に触れないよう注意すること。
- (2) 本剤は眼及び皮膚に対して刺激性があるので薬剤が眼に入ったり、皮膚に付着しないように注意すること。眼に入った場合には直ちに十分に水洗し、眼科医の手当を受けること。皮膚に付着した場合には直ちに石けんでよく洗い落とすこと。

◆魚毒性

- (1) 水産動植物（魚類）に強い影響を及ぼす恐れがあるので、河川、湖沼及び海域等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。
養殖池周辺での使用は避けること。
- (2) 水産動植物（甲殻類、藻類）に影響を及ぼす恐れがあるので、河川、養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。
- (3) 使用残りの薬液が生じないように調製を行い、使いきること。散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないこと。また、空容器、空袋等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理すること。